

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Quality of Life and Lung Function after Pleurectomy/Decortication for Malignant Pleural Mesothelioma

(悪性胸膜中皮腫に対する胸膜切除/肺剥皮術後の QOL、呼吸機能の変化)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

器官・代謝制御系

呼吸器外科学 (指導教授 長谷川 誠紀)

氏 名 中道 徹

悪性胸膜中皮腫(MPM)の治療において胸膜切除/肺剥皮術(P/D)は大きな役割を担っているが、P/DのQOLに与える影響についての報告は決して多くない。当科ではP/Dが生命的予後に寄与する可能性があることを報告してきたが、広範な胸膜の剥離および剥皮に伴いその手術侵襲は通常の胸部手術に比べて大きいことが知られている。今回、術後QOLの面でも許容できる術式か評価するため、P/D術後のQOL変化について検討した。

今回、後方視的コホート研究としてP/D術前と術後3, 6, 12か月でのQOLを比較検討した。QOLの評価にはSF-36を用いた。SF-36は36問からなる質問紙法でQOLを8項目に分けて解析することができる。また併せて呼吸機能や臨床情報との関係性についても検討した。2014年6月～2018年6月にP/Dを施行した連続65例のうち、55例で質問紙に協力いただけた。その55例のうち、術前、術後3, 6, 12カ月の4ポイントすべてで質問紙に回答できた45例について解析した。physical functionとrole physicalは術後3か月で低下し、12か月を経過しても改善しなかった。body painは術後3か月で低下した後に改善したものの、12か月たっても術前よりは低いレベルのままであった。general health perceptions、vitality、social functionは術後3か月で一度低下するも、術前レベルまで改善した。role emotionalは術後低下し、一度6か月で改善するも12か月では再度低下した。mental healthは術後に術前より上昇し、12か月を経過しても低下しなかった。45例のうち同4ポイントで呼吸機能検査を施行できた39例について呼吸機能についても解析したところ、術後60%程度に低下し12か月を経過してもほぼ改善しなかった。その他、左側に比べて右側の手術で呼吸機能の低下が大きいことが分かったが、QOLについては左右差を認めなかった。

身体的なQOLは術後低下した後の改善に乏しかった。しかし、呼吸機能が遠隔期でもほぼ改善しないのに対しQOLは12か月の経過で改善する傾向にあり、呼吸機能検査だけではQOLの評価に限界があることも示唆された。精神的な項目は一度低下するものの術前レベルまで改善する項目が多く、むしろ術後に改善する項目もあった。過去の報告では、P/D後にQOLが低下しても、遠隔期で術前レベルに戻ったり、むしろ術前より改善したりすることが示されていたが、本研究では、早期でPSが良好な患者においてはQOLを低下させることが示唆された。P/Dの適応には、術後のQOL低下を考慮する必要があり、呼吸機能検査などにとどまらない多面的な術後フォローが重要になると考えられた。